

旧奈良町の町並調査（Ⅲ）

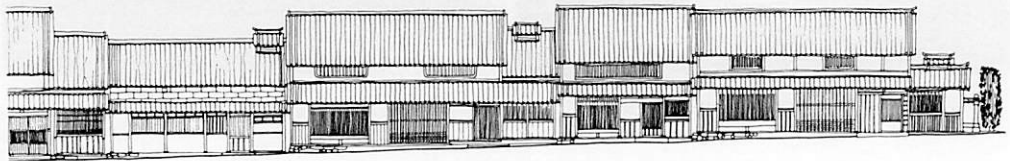
建 造 物 研 究 室

奈良市は旧奈良町の全域を調査範囲とする伝統的建造物群調査を4カ年計画で実施している。1982・1983の両年度は、文化庁補助金の交付を受けて旧奈良町東南部を調査し、1984年度は市で旧奈良町西半部の地域を調査対象とし、また保全計画策定のための基礎作業も行なった。調査はこれまで同様に一次調査として対象地域の主要道路に面した家屋の用途別、構造別、階高別、年代別の調査と外観写真撮影、関係資料の収集を行ない、次いで二次調査として代表的と思われる町家、長屋あわせて10軒を抽出し、建物の実測ならびに内部調査を行った。このほか町並保全計画立案のための基礎調査として、奈良町の街区構成の分析、町並景観を特色づける要素の抽出と分析等を行い、保全計画立案のための課題を整理した。

今回の調査区の大部分が近世奈良町の西限にあたる町々である。三条通は大阪からの主要交通道路であって、近代になっても商店や旅館がたちならび、いわば奈良町の東西軸となっている。三条通より南側は、街区の形態が不整形となり、街路が東西あるいは南北にまっすぐには通らず、川に沿って曲がったり、くい違ったりしている。三条通より北は、街区の乱れは少ないが、一つの街区が長方形であったり、規模が大きい点が目立っている。

今回の調査で注目されるのは町家と農家の中間的な形態をもつ町家の存在である。トオリニワ中央に煙返しを置き、この壁を受けるための大梁、大梁を受ける太い柱が意匠上の見せ所ともなっている。次に注目されるのは新しい型式の町家が多く見られることである。奈良町東辺部は近世以降に市街化が進んだ地区があり、従って伝統的な形態をとりながらも、部分的に変更を受けた町家が多く見られる。本来トオリニワか別棟の座敷のみが落棟になったのに、構造上の進展に伴い、トオリニワ以外を落棟とする町家ができたり、庇の広い町家が発生してくる。旧来と変わらぬ長屋は建設され続けるが、独立住宅でありながら隣接して建つ集合住宅が昭和初期に現われる。これは近年の郊外型住宅に受を継がれる型であろう。

奈良町において、伝統的な地域文化財が相俟って作りあげている景観が町づくりにいかに重要なものであるかは、これまで報告書などで述べてきた。町家の建物構成や意匠は、気候・風土や住宅密集地であること、敷地が狭いことなどを考慮したものである。町家は、木造のため増改築が容易である。いいかえれば、町家は増改築することで住む人の要求に対応しながら景観との調和をはかることが可能である。旧奈良町中心部でも、周縁の地区でも町家の建替えが近年目立ちはじめている、奈良町保全の計画と実施が焦眉の課題となりつつある。（上野邦一）



奈良・油坂の町並